

ラフカディオ・ハーン没後百年——最近の著作や論文を部分的に概観する——上

日本礼賛の親日家から世界文学の漂泊者へ

稲賀繁美
国原日本文化研究センター研究員・
総合研究大学院院大学教員

『怪談』で知られる小泉八雲ことラフカディオ・ハーンは、1904年9月26日に東京で亡くなった。本年は没後百年にあたり、各地で記念行事や研究会が催された。たしかに八雲は東洋の尋線に連れ、日本の霊の世界を見事に綴った。作文教師としてはデ・アーミチスの『クオレ』を日本の学生相手に実践し、東大英文学教授としては後任の夏目漱石を悩ませる偉才だったことは平川祐弘が明らかにしている。その位置付けについてはジョージ・ヒューズ『ハーンの軌跡の中で』（研究社・2002年）に好意的な評定が見られる。

だが作家としての真価はようやく近年その輪郭を明らかにし始めたのではないか。従来までのハーン評価といえば、日本の民俗を語ったマイナーな英語作家というに過ぎず、国粋主義の時代には『神國日本』の著者として日本で自己囃された反面、日本人の自己陶醉を揶揄した「親日家八雲」は、西洋人宣教師にとって、端から唾棄すべき存在に等しかった。くわえて戦後の北米の学術的な日本学会では、ハーンは長らく白眼視されてきた。対象への批判を欠いた、過剰なまでの日本理想視と、時代遅れな異国情緒。ハーンの主観が勝った観察など学問的には無価値と見るのが、宗教学や民俗学をはじめとする学会の常識だった。

太田珪三の『ラフカディオ・ハーン 虚像と実像』（岩波新書・1994）は、そうした北米の風潮を伝えて貴重だろう。『こころ』に収められた「或る停車場にて」で、刑場に向かう受刑

囚は、彼に父を殺害された息子の面前で涙ながらに罪を悔い、それが集った駅前の民衆の涙を誘う。その様子に、ハーンは日本人の心を読みこんでみせた。だが当時の新聞記事に当たってみれば、息子への謝罪の光景は、ハーンの創作だったことが判明する。虚構立立てに基づいた日本心情論など、無根拠と言ひ咎められても仕方あるまい、というわけだ。

ところが近年の脱植民地地研究の趨勢にあって、一転、ハーンの先駆性が注目を集めるに至った。ギリシアのレフカダ島に生まれ、ダブリンで幼少を過ごし、アッシューのカトリック学校に寄宿し、やがて渡米してシンシナティーからカリブ海・マルティニックへ、さらには太平洋を越えて出雲、熊本、神戸と経由して東京に移るハーンの長大な足跡。そこには、クレオール言語、口承文学、マイナー文学といった話題に取り組む先駆者としてのハーンの様子が浮かび上がってくる。平川祐弘『ラフカディオ・ハーン植民地化・キリスト教化・文明開化』（ミネルヴァ書房・2004）は、カリブ海でのクレオール口承伝承採取者としてのハーンが、日本での再話文学作家としての八雲の下地にあることを具体的に実証した。1693年から1703年までマルティニックに滞在した怪/快僧ラバ神父の行状が、いわば反面教師の役割を演じてハーンの宣教師嫌いを高じさせた子細など、新知見に立脚した解釈を縦横に披露しており、その予想外な展開は、驚嘆に値する。

[以下次号]

西成彦『耳の悦楽 ラフカディオ・ハーンと女たち』(紀伊國屋書店・2004)は、平川に伴走しながらも、異なった音調を響かせる。異なっています。Hearnにはearが隠れているとして、「耳のハーン」を解明したが、本書の冒頭にはこうある。「ラフカディオ・ハーンの言葉は、多くの人々の声からできあがっている。声だては、そもそも英語など用いはずもない人々の声である。しかも、言葉だけではない。人間の生きた身振りや息づかい、ひとりひとりの気配が、英語で書かれたそのテキストの中には封印されている。ハーンの著作をむとくとくということは、その封印をとくことである。」

さらに最近の論文(『國文學』學燈社・2004年10月号)で西は、ハーンの「耳なし芳一/法」を読むアントナン・アルトーに注目する。そして盲者が聴覚的な記憶に優れるといった常識を越えて、視覚を奪われた語り手の脳裏にこそ、晴眼者には期待できない極彩色の世界が広がっている可能性を透視する。実際ハーンは左眼を事故で失明し、右目も極度の近眼だったが、色彩の喚起力にも人一倍敏感だった。

そうしたハーンの視覚的感受性にとりわけ強く感応したのが、ほかならぬ柳田國男だった。牧野陽子の説得力ある指摘(シンポジウム『世界の中のラフカディオ

ラフカディオ・ハーン没後百年
世界文学の漂泊者へ
日本礼賛の親日家から

最近の著作や論文を部分的に概観する。下

国立日本文化研究センター 研究員
総合研究大学院大学 教授
稲賀繁美



オ・ハーン』に従えば、『知られざる日本の面影』に描かれた盆踊りの宵の提灯の描写は、柳田の『遠野物語』の盆踊りの叙述に直に響いている。だが、この「脚色」の事実は、けっしてそのまま柳田の『遠野物語』の価値を無にはすまい。とすれば逆にハーンの「脚色」にばかり目くじらを立てるのではなく、いささか公平を欠く判断ということにもなるろう。

劉岸偉『小泉八雲と近代中国』(岩波書店・2004)が今年の大きな収穫であることは、疑いあるまい。日本では未知の情報が満載され、的確な評価が流麗な筆致で加えられる。例えば、ストラスブール大学に博士論文『悲劇心理学』を提出した朱光潛は『東方雜誌』(1926年9月)に「小泉八雲」を発表し、ハーンを「東方の人情美を理解できた最初の西洋人」と評価し、書簡集の魅力を語っている。その朱は書簡体の著作、『青年に与える十二通の手紙』(1929)で、一躍文壇の寵児となったのだが、そこには朱の私淑するブラウニングの詩が引かれる。ところがその詩の解釈には、ほかならぬハーンの解釈が当てられている。即ち、明確な言葉とならず、それゆえすぐに忘れ去られた空想のうちこそ、ある人の仕事の最良の玉片が潜んでいる——と。さらにハーンが重視した「小品文」とは、言いでは盛行を見せたは意い難かったが、むしろ1920年

代以降の中国——周作人の周辺——で、厨川白村などをも媒介として開花したのではないかと、著者は指摘する。加えて、生瑠りのマルクス主義に傾斜してゆく「創造社」の若手作家たちが、周の兄である魯迅の「閑暇」さを性急に非難した際に、魯迅は逆に「閑暇」の大切さを説いて見せた。そしてこの「閑暇」の徳は、魯迅がハーンから引き出した価値観だったことも、本書はさりげなく指摘する。

日中戦争期、時局柄「親日家」と見なされたはずのハーンの遺作『日本——ひとつの解明』(邦訳名は『神國日本』)の中国語訳が、潜伏中の中国共産党員を中心として編集された『雜誌』(1942復刊)に、足掛け4年かかりで掲載された事実は、意味深長といえてよい。そこには、誰を奸漢、誰を愛国者などとは単純に色分けできない、当時の上海での複雑な文壇事情が垣間見られるからだ。ちなみに曹暉による翻訳の種本だった戸川秋骨訳の『神國日本』(1938)からは、古来の美徳が急速に失われてゆく日本の将来を危ぶむ、ハーン晩年の警句の部分は、(時局への配慮からか)ことごとく削除されていた。このように劉岸偉の著書は、小泉八雲がいかに読まれたかの実証的解明の大切さを教えてくれる。没後百年を迎えて、ハーン研究は、新しい地平を拓きつつ、改めて読者に迫ってくるようだ。